８　　常葉と母　　　　　　　　　　　　　　　　　　　文法　終止形接続の助動詞

読解　具体的内容をつかむ

新傾向 登場人物の心情や言動を読み深める

が産んだ（）との間の三人の子どもは男子なので平家方が行方を捜したが、見つかったのは常葉の母の老尼だけだった。平家方は老尼を厳しく問いつめた。

　常葉が母申しけるは、「左馬頭討たれぬと聞こえしより、㋐いとけなき子ども引き具して、行方も知らずなり候ひぬ」と申しければ、「①いかで知らざるべき」とて、さまざまのに及び、母、のある時申しけるは、「われ、六十にあまる老いの身なり。ことなくして過ぐすとも、いくほどの命かあるⓐべき。三人の孫どもは、いまだ十歳にもならぬ幼き者ども、もしことなくあり得ば、②行方はるかなるべし。今日明日とも知らぬ㋑露の命を惜しみて、末はるかなる三人の命をば、いかでか失ひ候ふべき。たとひ行方知らせたりとも、申し候ふⓑまじ」とぞ申しける。

　常葉、にてこのこと聞き伝へて、「わが子を思ふやうにこそ、母も我をば③かなしむらめ。我ゆゑ苦を受くと聞きながら、いかでかでて助けざるべき。を経てもあらざる親子の仲なり。責め殺されてのちは、悔しむともあらじ。母この世にある時、出でて助けむ」と思ひて、三人の子どもを引き具して、故郷の都へぞ帰りける。

* 語注

片時の暇＝（拷問の）少しの合間。

大和＝現在の奈良県。

無量劫＝計り知れないほどの長い時間。

【原文】

　常葉が母申しけるは、「左馬頭討たれぬと聞こえし朝より、いとけなき子ども引き具して、行方も知らずなり候ひぬ」と申しければ、「いかで知らざるべき」とて、さまざまの拷問に及び、母、片時の暇ある時申しけるは、「われ、六十にあまる老いの身なり。ことなくして過ぐすとも、いくほどの命かあるべき。三人の孫どもは、いまだ十歳にもならぬ幼き者ども、もしことなくあり得ば、行方はるかなるべし。今日明日とも知らぬ露の命を惜しみて、末はるかなる三人の命をば、いかでか失ひ候ふべき。たとひ行方知らせたりとも、申し候ふまじ」とぞ申しける。

　常葉、大和にてこのこと聞き伝へて、「わが子を思ふやうにこそ、母も我をばかなしむらめ。我ゆゑ苦を受くと聞きながら、いかでか出でて助けざるべき。無量劫を経てもあらざる親子の仲なり。責め殺されてのちは、悔しむとも甲斐あらじ。母この世にある時、出でて助けむ」と思ひて、三人の子どもを引き具して、故郷の都へぞ帰りける。

問一　次の「内容わしづかみ」の空欄に本文中の語句を書き入れよ。

常葉の〔　　〕はどんなに〔　　　〕を受けても〔　　　　〕の〔　　　〕を答えない。〔　　　〕でこのことを伝え聞いた〔　　　〕は、母を救出するため、故郷の〔　　〕へ戻った。

問二　波線部㋐・㋑の意味を答えよ。（㋐は終止形でよい。）〈３点×２〉

㋐〔　　　　　　　　　　〕　㋑〔　　　　　　　　　　〕

問三　二重線部ⓐ・ⓑの助動詞の文法的意味と活用形を答えよ。〈３点×２〉

ⓐ〔　　　　　〕〔　　　　　〕形　ⓑ〔　　　　　〕〔　　　　　〕形

問四　チェック問題　［終止形接続の助動詞］

　次の傍線部を現代語訳せよ。〈２点×３〉

１　春過ぎて夏来たるらしの衣ほしたりの　　（万葉集）

２　霜の上に朝日さすめり。　　　　　　　　　　　　　　（和泉式部日記）

３　妻戸をやはらかい放つ音すなり。　　　　　　　　　　（堤中納言物語）

１〔　　　　　　　　　　　　〕　２〔　　　　　　　　　　　　〕

３〔　　　　　　　　　　　　〕

問五　傍線部①・③を現代語訳せよ。〈５点×２〉

①〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

③〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問六 傍線部②とは、どういうことか。三十字以内で答えよ。　〈10点〉

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問七 本文の内容に合致するものを一つ選べ。〈８点〉

ア　常葉は、老尼が本当のことを答えたにも関わらず平家方に釈放されなかったことを悔しく思った。

イ　常葉は、追っ手の注意を引きつけてくれる老尼の姿に心を打たれ、母を見捨てて逃げてしまった浅はかさを後悔した。

ウ　常葉は、老尼への理不尽な扱いに腹を立て、母の潔白を訴えるために、子どもたちとともに都に引き返した。

エ　常葉は、老尼が母としてと振る舞っているという話を聞き、居ても立ってもいられなくなった。

　〔　　　〕

問八　都へ引き返した後、常葉は平家に捕らえられてしまう。次の【資料】は、拘束された常葉のもとへやってきた老尼（母）がその時常葉に話した言葉である。本文と【資料】を読み、常葉と老尼の心情や言動について説明したものとして適当でないものを一つ選べ。〈４点〉

【資料】

「あな、恨めしの心遣ひや。老いたるわが身は、とても近き後の世なれば、ながらふべくとも、いつまでぞ。わざとも身に替へて、孫どもをこそ助けたけれ、何しに子どもをば具し出でて、われに憂き目をば見せ給ふぞ。姫・孫どもを再び見ることの、まことにしけれども、孫どもが空しくならむことこそ、悲しけれ」

ア　常葉は、罪のない母を助けることは子として当然のことだと考えて都に戻ってきたが、老尼は、いかなる拷問にも耐え、孫を助けようとしたことが無駄になってしまい、「あな、恨めしの心遣ひや」と嘆いた。

イ　常葉は、自分の失態のせいで母が捕らえられたことに自責の念を感じていたが、老尼は、「わざとも身に替へて、孫どもをこそ助けたけれ」と思って、常葉の罪を被った自分の努力が報われなかったことを悲しんだ。

ウ　常葉は、我が子を思う一方で母のことも大切に思っていたが、老尼は、「何しに子どもをば具し出でて、われに憂き目をば見せ給ふぞ」と言って、常葉や自分自身よりも孫の将来のことを一番に考えていた。

エ　常葉は、母と二度と会えなくなってしまっては後悔しきれないと考えて都に戻ったが、老尼は、「孫どもが空しくならむことこそ、悲しけれ」と、孫との再会の喜びよりも、その将来への不安を募らせた。

〔　　　〕

【解答】

問一　母／拷問／孫ども／行方／大和／常葉／都

問二　㋐＝幼い　㋑＝はかない命〈３点×２〉

問三　ⓐ＝推量・連体形　ⓑ＝打消意志・終止形〈３点×２〉

問四　１＝来たらしい。

　　　２＝朝日がさすように見える（朝日がさすようだ）。

　　　３＝音がするように聞こえる（音がするようだ）。〈２点×３〉

問五　①＝どうして知らないはずがあろうか、いや知っているはずだ。

　　　③＝いとおしんでいるのだろう。〈５点×２〉

問六　三人の孫が、何事もなければ長く生きていくであろうということ。（30字）〈10点〉

問七　エ〈８点〉

問八　イ〈４点〉

【現代語訳】

常葉の母が申し上げた（こと）には、「左馬頭が討たれてしまったと耳にした朝から、幼い子どもを引き連れて、行方知らずになりました」と申し上げたところ、「（常葉の母が）どうして（彼らの行方を）知らないはずがあろうか、いや知っているはずだ」と言って、いろいろな拷問（をする）に及び、（常葉の）母は、（拷問の）少しの合間がある時に（六波羅に）申し上げた（こと）には、「私は、六十余歳の老いの身だ。何もなく過ごしても、どれほどの寿命があるだろうか、いやないだろう。（けれども）三人の孫たちは、まだ十歳にもならない幼い者たち（であり）、もし何事もなく平穏無事でいることができるならば、（彼らの）行く末は長いものであるに違いない。今日明日ともわからないはかない（自分の）命を惜しんで、行く末はるかな（幼い孫）三人の命を、どうして失いましょうか、いや失うわけにはいきません。たとえ（常葉が自分たちの）行方を（私に）知らせたとしても、（私はあなたがたに）申し上げますまい」と申し上げた。

常葉は、大和でこのことを伝え聞いて、「（私が）自分の子どもを思うようにきっと、母も私をいとおしんでいるのだろう。私のために（母が拷問の）苦しみを受けると聞きながら、どうして出て行って助けないでよいものか、いやよくはない。計り知れないほどの長い時間が経っても変わらない親子の（深い）縁である。（母が拷問によって）責め殺された後（になって）は、悔やんでもどうしようもないだろう。母がこの世に生きている時に、出ていって救出しよう」と思って、三人の子どもたちを引き連れて、（常葉は）故郷の都へ帰った。

【資料】現代語訳

「ああ、恨めしい心遣いであることよ。老いた我が身は、すぐに来世を迎えることになるので、（命を）長らえたとしても、どれほど（の時間もない）ぞ。どうにかして（自分の）身に替えて、孫たちを助けたいと思ったけれども、どうして子どもたちを連れ出して、私をつらい目にあわせなさるのか。娘や孫たちをまた見ることは、本当に嬉しいけれども、孫たちが命を落としてしまうようなことは、悲しいことであるよ」

【補充問題】（＊行数は本書に対応）

問１　現代語訳せよ。

①「いくほどの命かあるべき」（４行目）

②「いかでか失ひ候ふべき」（６行目）

問２　言葉を補って現代語訳せよ。

①「いかで知らざるべき」（２行目）

②「たとひ行方知らせたりとも、申し候ふまじ」（６行目）

【補充問題解答】

問１　①「どれほどの寿命があるだろうか、いやないだろう」

②「どうして失いましょうか、いや失うわけにはいきません」

問２　①「常葉の母（老尼）がどうして常葉とその三人の子供たちの行方を知らないはずがあろうか、いや知っているはずだ」

②「たとえ常葉が自分たちの行方を私に知らせたとしても、私はあなたがたに申し上げますまい」